

論文番号 223

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Characteristics of child passenger deaths and injuries involving drinking drivers

子供が車に同乗中、死亡や怪我にいたる状況分析

執筆者

Judith Redfern, Chris Mckevitt, Ruth Dundas, Anthony G. Rudd et al

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Stroke. 2000;31:1877-1881

キーワード

Lifestyle, risk factors, stroke prevention

要旨

背景

アメリカ合衆国では、交通事故がきっかけで子供や24歳までの青少年が死亡することが問題になっている。交通事故にあった子供の約24%は飲酒運転によるものである。

目的

子供が同乗中に起きた交通事故を分析して、死亡や怪我にいたった関係を飲酒運転の視点から検討し、予防策を考察する。

方法と対象者

0歳から14歳までの乳幼児・少年が車に同乗中に交通事故に巻き込まれて死亡したデータ(1985年から1996年)と1988年から1996年に怪我をした対象者データ。死亡や怪我をした子供を運転手の飲酒量別に解析を行った。

結果・結論

1985年から1996年の間に、5,555名の子供が飲酒運転の車に巻き込まれて死亡している。このうち、3,556名(64%)の子供が飲酒運転の車に同乗していて死亡している。飲酒せずに運転していて事故を起こした群に対して、飲酒中に事故を起こした群の割合の比をみると、男性であることは1.4倍、運転手が25~34歳であること1.3倍、飲酒運転として有罪判決を下されたこと6.6倍、免許取り消し2.4倍、スピード違反1.2倍となり、飲酒運転のリスクの大きさが明らかになった。

また、同乗中の子供の年齢別、運転手の血中アルコール濃度別にシートベルト着用率をみると、子供の年齢が上がるに従って、また血中アルコール濃度が上がるに従ってシートベルト着用率が低下していた。これらの結果から、飲酒運転は、同乗中の子供の死亡を増加させており、これはシートベルトの着用率低下にみられるように、飲酒することで安全面に対する認識が落ちることが影響していると示唆された。